

タイトル	エルンスト・エンゲルの修業時代
著者	太田, 和宏; OHTA, Kazuhiro
引用	季刊北海学園大学経済論集, 59(3): 1-15
発行日	2011-12-30

## 《論説》

## エルンスト・エンゲルの修業時代

太 田 和 宏

## 1. 序

エルンスト・エンゲル (Ernst Engel 1821-1896) は、日本では中学校や高等学校で教わるエンゲル係数やエンゲル法則という用語を通じて、よく知られている。だが反面、その人生、人となり、仕事ぶりについてはあまり知られていない。知られていることといえば、せいぜい、プロイセン統計局長を長く務めたことと、統計学発展の基礎を築いたことくらいであろう。

私の乏しい経験によれば、ドイツでも事情は似たようなものといってよい。いやもしかすると、当人がドイツ人であるだけに、その認知度は日本よりも悪いかもしれない。何しろ大学の中でさえ、私がエンゲルの名を口にすると、「Engel? Wer?」という反応が多かったのだ。もっとも「エンゲル法則の……」と説明すると、たいていは「ああ、あのエンゲルね」という答えが返ってきたのではあるが。

だが、わが国で名前がよく知られているというのは、理由のないことではない。かつての日本では、エンゲルは相当に注目されていたからである。たとえば、戦時下の1940年ころから、大原社会問題研究所の高野岩三郎のもとで、統計学古典選集全12巻が刊行され始めるが、その第11巻と第12巻にはエンゲルの代表的な論稿4編が、いずれも森戸辰雄による翻訳で（ほかに二つの小品とともに）収められている<sup>1</sup>。そのうちの2編が、収録論文は1870年代のものまでとするという編集方針から外れているにもかかわらず、「エンゲルの数論文は、近来我国に於る労働関係の統計論文中に屢々引用を見る所であり、且我研究所の使命に鑑み、年代の稍々新しきにも拘らず、特に之を加へたる次第である」(高野)<sup>2</sup>との説明であえて加えられていることからみても、エンゲルへの注目度の高さがうかがわれるのである。思えば、日本の社会科学が、社会改革への熱い情熱を内奥に秘めながら、同時にその立論の根拠には科学的な精確さを持たねばならないという、まさしくエンゲルと同じ理念によって導かれていた時代の、幸福な所産といえるだろう。

さらにさかのぼれば、日本が明治初期から中期にかけて官庁統計を創設する上で、統計学の理論体系や統計教育、統計の作り方など実用面を中心に、エンゲルの仕事を積極的に摂取していったことは、同選集第11巻に掲載された訳者森戸による「エルンスト・エンゲルの我国統計界との交渉」との副題をもつ端書から明らかである。

実はこの第11巻の冒頭には、森戸が書いた「エンゲルの生涯と業績」と題する長文の評伝が掲げられている。それは、森戸がエンゲル研究に費やした労力の大きさと、エンゲルへの敬愛とが結実した名文といってよい。ことに統計学の発展のうえに記されたエンゲルの功績については

詳細を極めているし、社会改革者としてのエンゲルの立ち位置についてもおよその見取り図を得ることができる。だが残念なことに、私生活を含むエンゲルの生涯全般については、いくつかの追悼文と人名辞典に依拠するのみで、履歴書の域を出ていないといっても過言ではないだろう。逆にいえば、エンゲルが没した1896年から森戸がこの文を書いたと思われる1941年までの間に、エンゲルがいかに忘れ去られ、その人と業績について書かれることがいかに少なかったかということの証でもある。

私は最初の著書『家父長制の歴史構造』において、19世紀後半のドイツの企業と社会が、新たな装いをこらした家父長制的な考え方を指針として、どのように労働者あるいは国民を支配しつつ経済的躍進を遂げていったのかを明らかにした。そこでは責任を負う立場に立った者によるいわば上からの恩情的な配慮が、国民福祉の源泉であったし、その配慮の代償として逆らうものは厳しく排除・抑圧された。だが、そうした関係のもとでも、自助と自立を求める下からの労働者の運動は、避けがたく興りそして敗北していったことを、第二の著書『オフサイドの自由主義』で示した。とりわけ、社会的自由主義という理念に導かれた運動は、100年後にはその要求のことごとくが実現されたという意味において歴史的正当性を持っていたにもかかわらず、当時の現実社会の中ではほとんど有効性を発揮できなかったという、著しい対照性のなかに、第一の書で示したドイツ社会の問題性は如実に反映されていたのであった。こうして上からと下からのベクトルのぶつかり合いを見てきたのだが、中間的な位置にいた人々はいったい何を考え、どのような役割を果たしていたのかという問題が残った。そうした人々の一人である社会政策学会の大御所ルーヨ・ブレンターノについては、自叙伝を共訳することで<sup>3</sup>、その役割のあらましを納得することができた。だが私がおもったのは、支配体制の内部にいて、支配の現状に飽き足らず、与えられた職務の遂行を通じて少しでも状況の改善を模索する「体制内改革派」についてであった。エンゲルが好個の素材になると思われた。

資料を集め始めてみると、エンゲル自身が書き残したものは、無署名だがエンゲル執筆と推定できるものも含めて、大小合わせて山のように集まった。自前の機関誌をもち、そこにいくらかでも発表できたのだから、当然といえば当然である。だがそれらは、職務にかかわる公的世界のものばかりだった。エンゲルの人柄と人生について書かれたもので私の前にあるのは、森戸が依拠したいいくつかの小文と、森戸による評伝のみであった。私は森戸の文章に注目した。そこに書かれていた二つの事柄が特別に私の関心を引いた。

ひとつは、1882年エンゲルが22年間にわたって務めあげてきたプロイセン統計局長の職を、61歳で辞するについて書かれたものである。「この辞職は表面上は彼れの持病の心臓疾患と神経衰弱によるものとされているが、実際には彼れの信奉する社会的自由主義が、宰相ビスマルクの国家主義と相容れなかったことも手伝ってみると云われている。」<sup>4</sup>「云われている」に典拠は示されていない。前記小文にもこの種の記述はない。なにをもって森戸はこの文を書いたのだろうか。これは中身を確認しておく必要があるようだ。

もう一つは、引退後の生活についてである。エンゲルはすでに統計局長在任中に、将来妻が一人になっても困らぬようにと、ドレスデン近郊の小邑ゼルコヴィッツに「寡婦の住ひ」(Witwensitz)を建てておいた。引退とともに、「今や彼は『数から遠ざかって』procul numerisここに移り住んだのである。ローマの古詩人ホラチウスを想起されるこの格言をエンゲルは

— 屢々伝えられているように — 彼れの門扉には掲げなかったが、彼れの閑居をこの名(数外荘とでも訳すべきか)を以て呼ぶ意図ではあったらしい。』<sup>5</sup>と森戸は書いている。numerisには「価値」に類する意味もあるから、「名誉から遠ざかって」というような意味をも二重にかけて隠遁の決意を示したのであろう。彼はこの地で地域の公共的活動に参加するかたわら、1890年の妻の死を挟んで1896年の自身の死に至るまで、残された仕事をまとめるべく著述を続けたという。森戸は、晩年のエンゲルに次のような美しい文章を捧げている。

「彼れの絶筆である名著『生活費』論を繙く者は、学問の中心地を離れ、一人の助手をも持たず、必要な参考書類にも事を欠ぐ逆条件の下で、しかも深まる老齢・病弱と戦いつつ、計算機を唯一の伴侶として、旺盛なる学問的・社会的意欲のままに、人類福祉のためにその研究に精進した老学究の姿を念頭に描かれるとよい。』<sup>6</sup>

この記述に接してからそう遠くない1999年春、私は機会を得て、ベルリン、ドレスデンに資料収集に出かけた。ドレスデンの国立文書館にはエンゲルの足跡を示すカタログが少なからずあったが、いざ現物を請求してみると、ほとんどの書類がドレスデン空襲によって焼失したとのことだった。私はひどく落胆したが、ドレスデンに来たのは文書を集めることだけが目的ではなかった。私は新たな手掛かりを求めてゼルコヴィッツに向かった。

ゼルコヴィッツはドレスデンからローカル列車に乗って30分ほどのところにあった。小高い丘と線路の間に挟まれた、ほとんど何もない静かな住宅街だった。私はまず地図を手にいれ、そこに町文書館というマークを見つけた。それしか手掛かりはなかった。その文書館は日本の小さな町でよくみられる図書館程度の小さな建物だった。中には数人の女性職員がいた。入っていった挨拶をすませると、私はエンゲルについて調べる目的でやってきたと告げ、助力を乞うた。

「エンゲルですって？ 誰のこと？」

「統計学者で、エンゲル法則を発見したエンゲルです。」

「ああ、あのエンゲルね。それでこの町とどんな関係が？」

「彼は晩年この町に住み、ここで亡くなりました。彼が残した資料がここに保存されていないのでしょうか。また、彼が住んでいた家の住所が知りたいのです。」

すると職員の一人在私を文献資料のカタログ・コーナーに案内し、カードを繰ってくれた。だがそこにはエンゲルに関するものは何もなかった。がっかりしているともう一人の職員がやってきて、ここで亡くなったのなら死亡届の記録があるかもしれない、と行ってそちらに案内された。彼女がカードを繰ってみると、たしかにエンゲルの死亡に関するカードが一枚見つかった。そこには死亡の日付のほかに住所が記されているだけだった。だが住所がわかっただけでも大収穫だ。もしかすると子孫を通じて私文書に接することができるかもしれない。住所を地図の上で確かめてから、私は礼を言って文書館を辞し、めざす「寡婦の住ひ」に向かった。それは歩いて10分ほどのところ、ローカル線の線路に沿って建っていた。一戸建て住宅にしてはかなり大ぶりの、白い壁を基調にした二階建ての建物だった。古さのせいかわずらばかり荒れ果てた雰囲気をつたえていた。けれども玄関の上と軒の下に、青色の唐草模様風の文様がさりげなく装飾されているのを発見したとき、私はこれがエンゲルの建てた家に間違いないと確信した。愛する妻の老後のための家にふさわしい優しさと気品がかもし出されていたのである。私は迷わずベルを押した。中から70歳前後の男性が出てきた。挨拶を済ませて用件を説明すると、彼はエンゲルのことも、この家がエンゲルのものであったことも知らない、と答えた。いつこの家を購入したのかと尋ねると、1950年代末のことだったという。誰から購入したのかと尋ねると、権利証を調べてくれ

て、前の所有者は建築技師だったと教えてくれた。その技師がこの家を手に入れたのは1920年代のことで、それ以前の所有者のこともエンゲルのことも何も話さなかったという。私文書への手がかりは得られなかった。礼を言って辞する間際に庭を見せてもらえないだろうか頼むと、彼は快く応じてくれた。300坪ほどもある細長い庭は家よりももっと荒れ果てていたが、一番奥に丸い4、5メートルほどの花壇が立体的に作られ、中央には小さな石像が据えられていて、ここにも「寡婦の住ひ」の面影が感じられた。

森戸に触発されたエンゲル探訪は以上のようなようだった。それから細々と資料を読み進めてきたが、その間にエンゲルに再び光を当てる注目すべき仕事有二つ現れた。ひとつは、Erik Grimmer-Solem, *The Rise of Historical Economics and Social Reform in Germany 1864-1894*, New York 2003である。この本は、ドイツ歴史学派の形成とその主導のもとでの社会政策学会の結成の様子を丹念に描き、そうした潮流がドイツの社会改革にどう取り組んでいったのかを広い視野で論じた好著といえる。そしてこの潮流の形成に際して、エンゲルが重要な役割を果たしたことを、バランスよく明らかにしている。もう一つは、いや正確には同一人物による二つの著作だが、Daniel Schmidt, *Statistik und Staatlichkeit*, Wiesbaden 2005と、同じくDaniel Schmidt, “*Kenntniß ist Macht*” --- Ernst Engel in Sachsen, in: *175 Jahre amtliche Statistik in Sachsen*, Dresden 2006である。エンゲルのザクセン時代については、おもにシュミットに負うことになるだろう。このように、長い忘却の中から再びエンゲルがよみがえりつつあるかに見える。こうした動きに励まされて、私は今ようやく、今の時点で彫琢できる私なりのエンゲル像を、たとえ荒削りであっても描いてみようと思う。焦点は、社会改革者としての側面と、ビスマルクとの対立に置かれる。またそれらを通じてうかがい知ることのできるであろうエンゲルの思想や人格にも格別の注意を払いたい。そして、社会の上下の対立を調和させ、国民福祉の増進を目指すエンゲルの動機がいったい何に由来するのかということにも、少しでも迫れたら幸いである。

## 2. 出生から修行時代まで

エルンスト・エンゲルは、1821年3月26日ドレスデンで生まれた<sup>7</sup>。父の名はゲオルゲ・ベルンハルト・エンゲル (George Bernhard Engel) といい、酒蔵主任 (Kellermeister) の資格をもつワイン酒房の店主であった。父の父は、ヴェルツブルク近くのゾンマーハウゼン (Sommerhausen) で商人をしていたアンドレアス・エンゲル (Andreas Engel) であったというから、もともと小商人の流れをくむ家柄とみなしてよい。母クリスティアーネ・ロジーナ (Christiane Rosina) は、マイセン近くのガウアーニッツ (Gauernitz) で営業していた製粉業者ヨハン・アウグスト・メビウス (Johann Augst Möbius) の娘であった。ともに (おそらくは中下層の) 営業の中間層に属す似つかわしい取り合わせといえるだろう。

エンゲルの幼少年期については何もわからない。否定形でわかっているのは、ギムナジウムから大学へという教養市民となる者の典型的コースをとらなかったということだけだ。おそらくそれは前記の出自と関係しているだろう。彼の家庭環境は、金銭的には困らなかったか、ないしはいくらか余裕があったと考えられるが、知的な蓄積という面では教養市民層に遠く及ばず、したがって多くの経済市民層の例にもれずに実学志向が強かったと考えられるのである。ルーヨ・ブレンターノによれば、(おそらくは実科系の) 中等教育を終えたとき、エンゲルは大学で学ぶこ

とを望んだが、「父は彼を無理やり自分の酒場で給仕として働かせた」<sup>8</sup>という。ブレンターノはエンゲルの愛弟子の一人で、イギリスへの調査旅行や社会政策学会での活動で行動を共にすることが多かったから、何かの折にエンゲルが自分の生い立ちについて語ったのであろう。さらにブレンターノによれば、ほどなくしてエンゲルの父親が死に、それを契機に彼はローマに旅をした。この旅行にどのような意味が込められたかはわからないが、旅から帰ったのち、いくらかの受験勉強をへて、1842年10月、エンゲルは21歳にしてザクセン王立フライベルク鉱山学校(Königliche Sächsische Bergakademie zu Freiberg)に入学して、鉱山学・冶金学を学ぶことになった。

ただし、このフライベルク鉱山学校は、19世紀にそれぞれの鉱山地帯で、おもに鉱山現業職員を養成するために作られた鉱山学校(Bergschule)とは性格が大きく異なるので、この学校の特徴について少し述べておこう<sup>9</sup>。

フライベルクはドレスデンから西に40キロメートルほど離れたところにある小都市である。12世紀に近郊で銀の鉱脈が発見され、採掘がしだいに拡大していった。15-16世紀には産出量が最大規模に達し、王国の財政を潤すとともに、活気ある「自由な」鉱山都市が形成され、鉱山にかかわる技術・書籍・人材等が蓄積されていった。17世紀から18世紀にかけては、産出量が減少し始めたが、それへの対策という意味も込めて、鉱山経営を行政的に監督・奨励するために、鉱山監督官制度が整備された。それらは新たな人材の育成を不可欠の課題とした。つまり、鉱山業を再興し発展させるためには、自然科学的な専門知識を持つ技師が必要だったし、また監督官制度を運用していくためには、高度な専門的行政官が必要となった。そうした人材を育成するための高度な専門的教育機関として、1765年に、フライベルク鉱山学校が設立されたのである。18世紀のヨーロッパでは、近代国家の発展を支える殖産興業政策が推進されるようになり、その一環として鉱山業振興のための高等教育機関の必要性が広く認識され始めたようで、似たような学校が各地で設立されている。経済学者レオン・ワルラス(Marie Esprit Léon Walras 1834-1910)が一時在学し、ニッサンのカルロス・ゴーン(Carlos Ghosn 1954-) CEOが卒業したことでも有名になったバリ鉱山学校も1783年に設立された。そのほかでは、ロシア、オーストリア、スペイン、プロイセン、で同様の学校が作られている。ヨーロッパの広い範囲で、来るべき工業社会に向けての胎動が始まったといえるのではないだろうか。いずれにせよフライベルク鉱山学校は国立の高等鉱山学校としてはヨーロッパ最古のものに属するのである。

だがこの学校の特徴はそれだけではない。設立当初から著名な教授陣と質の高い教育を用意し、ヨーロッパ各地から続々と留学生を迎え入れているのである。この特徴は19世紀後半になっても変わらず、佐々木正勇氏の調査によれば、1871年から1915年の間に入学した3400人の学生のうち、外国人は1785人を数え、その比率は実に52.5パーセントに達している。そのうち100人を超えるのは、ロシア、アメリカ、イギリス、ルーマニアとなっている。まさしくこの学校は鉱山冶金を中心とする科学技術教育の「メッカとしてその名を世界に轟かせた」<sup>10</sup>のである。この学校は日本との縁も小さくない。明治政府は鉱業育成のために留学生を多数送り出したが、その派遣先は大半が同校で、佐々木氏は同じ時期の日本人留学生42人を数えている。その大半が帰国後、大学や鉱山学校で教鞭をとるか、鉱山の技師として働き、鉱業発展に尽くしている。そればかりか、幕末に蝦夷地の地質調査をおこなったアメリカ人パンペリー(Raphael Pumpelly)、明治初頭に同じく北海道を調査したライマン(Benj. Smith Lyman)、東京帝大理学部の教員を務めたネッター(Curt Adolph Netto)、さらには鉱山・製鉄所で指導に当たった

お雇い外国人の多くが同校の卒業生なのである。

教育内容も当初から充実していた。木本忠昭氏は創設2年後の開設科目として、純粋数学(「計算法」「計量法」「角度測定法」)、力学、気流学、水力学、流体力学、断面図法、地質製図、機械製図、鉱物学実習及び鉱物収集、冶金化学及び冶金術、鉱山測量、試金術、鉱山学、測量器具及び試金装置及び模型制作、を挙げている<sup>11</sup>。正規に卒業して学士(Akademiker)となるためには、3年の修学年数が必要だった。19世紀半ばになると、修学年数は4年に延長され、それに伴い専門科目は鉱物分析関連の科目と隣接科学を中心にさらに充実し、外国語、一般法学、国民経済学など文系科目も拡充された<sup>12</sup>。こうしてこの学校は鉱山・冶金学にとどまらず、広く自然科学系の実学的高等教育機関へと成長していった。ただし、パリ鉱山学校がその後グランゼコールの名門として少数精鋭のエリート教育機関へと発展していくのに対し、フライベルク鉱山学校は東ドイツ時代をへて現在は6学部約5000人の学生を抱える工科大学(Technische Universität Bergakademie Freiberg)となっている。

エンゲルは1842年の秋から1845年の初夏までこの学校で修学した。佐々木氏の調査では、1765年から1870年までの間に入学したのは2624人だというから、新入生は1年平均で25人ほどになる。きわめて少人数のエリート教育だと言える。入学者はアビトゥーア(大学入学資格試験)とは関係なく、独自の入学試験に合格しなければならなかった。25人のうちの何割かは外国人であったから、ザクセン人ないしはドイツ人にとっては、高度な学力を持つものしか通れない狭き門であった。どうやらこの試験のための準備をする予備門があったらしく、入学前のエンゲルの空白期間のうちのいくらかは、その予備門への通学にあてられていたかもしれない。あるいは自宅学習だったかもしれないが、とにかく彼は専門科目と外国語の準備を整え、試験に合格した。設立の前から奨学金制度が整備されていたというから、授業料無料、奨学金支給、寮住まいの恵まれた、そして禁欲的な勉学生活を送ったことであろう。禁欲的というのは、高度な実学を目指す鉱山学校では、大学よりも克己の心構えがより強く求められていたといわれるからである。それは一般の大学生から「陰気な生活」と揶揄されるほどだったという。専門課程3ヶ年で必要な科目数を修得した後は、国家試験に合格しなければならなかった。

エンゲルは卒業の年、首尾よく国家試験に合格した。エンゲルの後にプロイセン統計局長に就任した弟子のE. ブレンク(E. Blenck)はエンゲル追悼文の中で、「優秀な成績で合格した」と書いているが<sup>13</sup>、若くして抜擢されたその後の歩みから考えて、世辞や誇張と取る必要はないだろう。ともあれエンゲルはこうして、24歳のとき、若き優秀な技術者として実社会に巣立ったのである。

卒業後エンゲルは、当時の修業途上にある青年がよくそうするように、およそ2ヶ年をかけて、ヨーロッパ各地の鉱山・精錬所および研究機関に実務訓練の旅に出かけた。滞在先はドイツ諸邦、ベルギー、イングランド、フランスであった。この旅行に奨学金など何らかの資金援助があったのか、それとも自費によるものだったかはわかっていない。この旅では、のちの彼の人生にとって重要な意味を持つことになる二つの出会いがあった。足取りから考えて、彼は1845年から46年にかけての冬に、ベルギーでアドルフ・ケトレー(Adolphe Quételét 1796-1874)の知遇をえ、1846年の夏、パリでフレデリック・ルプレー(Frederick Le Play 1806-1882)と出会って、それから約1年間その下で研究に従事した。重要な意味を持つというのは、純然たる自然科学系の技術者として出発した彼が、やがて統計学に進み、社会問題に深くかかわるようになるにいたったきっかけがこの出会いにあったと考えられるからである。そこでエンゲルとのかかわりに

しぼって、二人の人物について少し触れておこう。

「近代統計学の父」と呼ばれるケトレー<sup>14</sup>は、学問的な出発点は数学であり、つぎに天文学へと翼を広げた。天文学は天体の法則から社会の法則を類推することへと彼を導き、数学の確率論は、観測・観察結果と誤差の関係を解決して、社会の法則を大づかみに把握する可能性を開いた。そして社会を集団として測定しようとする彼の新しい学問をして、野心をこめて「社会物理学の試み」と特徴づけた。具体的には犯罪率、死亡率、出生率などを明らかにし、そこには個々の人間の主観的意思を離れた一般的な結果が存在すること、その結果をもたらす諸原因を把握することによって状況の改善に役立てること、を主張したのである。彼はまた、王立アカデミーの理事、王立天文台長、中央統計委員会委員長などそうそうたる役職を歴任し、独立後のベルギーの学界の発展に尽力した。ことに統計委員会では、政府の統計実務に携わり、のちにエンゲルに強い影響を与えることになる1853年のベルギー労働者家族の家計調査をも立案・実施した。エンゲルがケトレーと出会ったのは、この調査の構想が練られ始めていてもおかしくない1846年ころ、ケトレーが50歳を少し超えた円熟の時であった。若きエンゲルはケトレーの業績・人物の大きさに圧倒されたに違いない。だがそれだけでなく、アカデミズム出身と実学出身という違いこそあれ、二人がともに自然科学を出発点としていたという共通性も知ったはずである。思うに自然科学系の人間が社会科学へと転身する上で、統計学は格好の入り口なのではないだろうか。二人の間にどのような会話があったかは知る由もないが、このときエンゲルはケトレーから強い感化を受け、ケトレーのように生きようという気持ちを抱いたとしても不思議はない。のちにエンゲルは家計費を分析するに際して、消費単位を単に人間一人にするのではなく、年齢・性別を加味した統計上の消費単位を提唱したのだが、その単位の名称をケトレーにちなんで「ケット」と名付けて、ケトレーの功績を永遠に記念しようとしたのであった。

ルプリーの生涯はケトレーよりもさらに華やかで、かつ陰影に富んでいた<sup>15</sup>。フランス北部カルバドスの税関職員の子として生まれたルプリーは、幼くして父を亡くし、寡婦となった母親によって貧しい境遇の中で育てられた。実業系の教育を受けるためにパリに出て、エコール・ポリテクニック (École polytechnique) をへて、23歳のときパリ鉱山学校を優等で卒業した。その後、雑誌『鉱山年鑑』(Annales des mines) と『鉱業統計』(Statistique de l'industrie minière) の編集実務に携わると同時に、鉱山学校で教鞭をとるようになったという。1840年には鉱山学校の冶金学教授になっている。前後して統計委員会議長、政府鉱山技師長(枢密顧問官)、視学官に任命された。鉱山学校教授としての彼の仕事ぶりは大変ユニークで、毎年半分は教壇に立つものの、残りの半年はヨーロッパ中、はては西アジアに至るまで公務の旅行に明け暮れるものだった。はじめはロシアなどの鉱山の視察や経営・監督が主だったが、生来持っていた人間福祉への関心から、人々の暮らしと家族のあり方に力点に移り、やがてヨーロッパの比較家族類型学という壮大な成果を生むことになった。旅行で視野が広がるのに伴って、研究分野も社会科学へと広がり、1843年までには社会科学を修めたという。ルプリーの研究方法の特徴は、加工された二次的資料よりも徹頭徹尾自分の観察に頼ることであった。すなわち、平均的な家族を選んだのち、数週間をその家族と一緒に暮らし、家族についてのあらゆる情報を直接聞き出すというものであった。彼の調査旅行の先と回数は、イギリス7回、ドイツしょっちゅう、ロシアとイタリア3回、スペインと西アジア2回、とされているが、そのほかにオーストリアーハンガリー、ブルガリア、ノルウェー、スウェーデン、スイスの家族情報が集められていて、これらにも自ら赴いたかあるいは調査員が派遣されたものと思われる。こうした国々から300の家族の詳細



細な情報が集められ、そのうち36家族について1855年に出版したのが、彼の代表作『ヨーロッパの労働者』(*Les ouvriers européens*)である。その特長は、ヨーロッパの東西の家族形態を比較しただけでなく、生活水準や家族福祉を含めたその相違が、経済的發展および工業化の進展と密接にかかわっていることを明らかにしたことであった。その成果は欧米諸国で絶賛され、その影響力は20世紀の後半に至るまで持続したという。

ルプレーについてはもう一つ注目すべき側面がある。彼がエコール・ポリテクニークで勉学に励んでいた時、同級生にのちに経済学者となるミシェル・シュヴァリエ(Michel Chevalier 1806-1879)がいて、二人は「机を並べた親友」だったという<sup>16</sup>。そしてこの学校は、サン＝シモン(Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon 1760-1825)が1825年に死んだときに、その弟子たちの拠点となっていたらしいのだ。二人はその時19歳の多感な青年だった。師の死後、弟子たちはテクノクラートが聖職者となって産業を發展させ、富の均霑をはかろうとする「サン＝シモン教会」を設立し、共同生活を始めた。二人はエコール・ポリテクニークを卒業して、ともに専門研究を継続するために鉱山学校へ入学し、そこを出ると職業生活を歩み始めた。そのころからシュヴァリエは教会内の原理主義グループに所属し、その中心的メンバーの一人になったのに対して<sup>17</sup>、ルプレーは微妙な構えをとったようだ。というのも、のちの1831年から32年にかけて、サン＝シモン教会が分裂して権力の介入を招いた時、シュヴァリエは風俗紊乱の廉で有罪宣告を受けた過激派教会員の一人として投獄されたのに対して、ルプレーはそのときすでに鉱山学校卒業後の数年をへて、エリートのコースに乗っていたからである。だからといってルプレーが理想を捨てたわけではない。貧しい環境で育ち、家族や郷党の期待を一身に担う若者は、富裕層出身の者と違ってまずは職業的に身を立てなければならないのだ。彼の理想が比較家族類型学という学問形成の原動力になったであろうことはいうまでもない。だがそれだけでなく、20数年の時を隔てて、その理想が実際政治の中で生かされる時がやってきたのである。隠れサン＝シモン主義者といわれるナポレオン3世がクーデタで権力を掌握すると、シュヴァリエやペレール兄弟などのサン＝シモン主義者たちをブレンに迎え、サン＝シモン主義に基づく産業奨励策を推進し始めた。1855年と67年の二度にわたって開催されたパリ万国博覧会は、その象徴であり、頂点でもあった<sup>18</sup>。この二つの万博ともに、シュヴァリエとルプレーが協力して準備の中心をにない、総指揮を執ったのである。(実はこの博覧会組織という点でも、ルプレーとエンゲルは因縁浅からぬものがあるが、それについてはあとで触れる。)

エンゲルがパリにルプレーを訪ねたのは、1846年夏のことであり、このときエンゲル25歳、ルプレー40歳であった。ルプレーは冶金学教授としてだけでなく、社会学者としても円熟の境地に差し掛かろうとしていた時であった。エンゲルはケトレーの時とは異なる、出自(さらには人間福祉という問題関心)における共通点を感じたはずである。それから一年近く彼はルプレーの下で研究に従事することになるが、この時の様子をのちにエンゲルは書き残している。すなわち、ルプレーは学生たちを連れて鉱山や精錬所に実地見学に出掛ける際、エンゲルにも同行することを許したのだが、この「見学旅行は、今日なほ、彼から受けた沢山の教訓によって私の生涯の明るい点をなしている」と。

このようにエンゲルは、20代の半ばまでに、当時すでに偉大な足跡を残していた二人の大家と出会った。ケトレーからは主に統計学への手ほどきを受けたとすれば、ルプレーからは家族・家計への着眼と労働者福祉の視点、ならびに徹底的に足を使ってデータを集めるといった研究方法を授かったといえるだろう。ルプレーはサン＝シモン主義の理想を保持し、シュヴァリエなどの

「修正サン＝シモン主義者」とも関係を維持していたようであるから、おそらくは社会思想や政治的立場の面でもエンゲルはルプラーによって何ほどか触発されるところがあったにちがいない。のちのエンゲルの軌跡と活躍をみれば、この時期の二人との出会いが彼の原型を形作ったのは間違いない。逆にいえばこの二人との出会いがなければ、エンゲルはエンゲルたりえなかったのである。

1846年から47年にかけての冬学期を終えた1847年の春、エンゲルは実務訓練の旅を終えて故郷のドレスデンに戻った。それから1年余り動静が途絶えるのだが、その期間彼は論文の執筆にいそんでいた。そして翌48年に刊行した論文の題名は『ザクセンにおけるガラス製造に関する若干の考察』(“*Einige Betrachtungen über die Glasfabrikation in Sachsen*”) というものであった。どうやらこれは大学を出た者にとっての博士論文(Dissertation)に相当すると考えられるのだが、彼の意図はそればかりではなかったようだ。というのも、彼は幾人かの出資者のめどをつけて、ガラス精錬所の設立を企てていたからである<sup>19</sup>。ところが時は彼に味方しなかった。1848年といえば、3月にベルリンとウィーンで革命がおこり、その動きはたちまちドレスデンにも波及して、自由主義的な改革を求める請願やデモが組織された。ザクセン政府は総辞職後、新たな「三月内閣」を組閣して民衆の不満を吸収する姿勢を見せたが、革命派の運動は鎮静化するどころか、ますます勢いを増し、ついには翌49年5月の大規模な蜂起と流血の惨事に至ったのである<sup>20</sup>。そうした緊迫した状況の中で、あてにしていた出資者は出資を取りやめ、計画は頓挫した。革命運動に対するエンゲルのかかわり方を示すものは見当たらないが、心中はさておき外見上はなんの関係も持たなかったとみて差支えないだろう。なにしろ彼は社会的上昇への野心をもってエリート校で勉学に励み、留学を終えて帰国し、キャリアの土台となる論文を書いたばかりでまだ職についていないのである。ふさわしい職に就くためにはそれなりの自制心が求められるのはいたしかたない。ザクセン政府の側も、将来を嘱望された若者が帰国し、「親方試験<sup>マイスター・シユトゥック</sup>作品」を仕上げたデヴェューするのを待ちかねていた節がある。だがそれについては項を改めて述べよう。

### 3. ザクセン政府への出仕

ドイツのほぼ中央に位置するザクセンは18世紀まで選帝侯国(Kurfürstentum Sachsen)という地位にあり、手工業や鉱山業が発達していて、もともと工業的潜在力に恵まれた有力な存在だった<sup>21</sup>。ナポレオンが覇権を握ると、その大陸支配の道具となったライン同盟(Rheinbund Königreich)に加入して積極的に協力し、ナポレオンから王位(Königreich Sachsen)とプロイセン領の一部が授けられた。だがこれがあだとなってウィーン会議では手ひどい報復にあり、国土の58%と人口の39%にあたる部分がプロイセンに割譲されるという苦境に陥り、しばらくは経済的沈滞と政治的反動体制をしのばなければならなかった。

ザクセンが近代工業社会へと歩み出す出発点は1830年代とみてよい。国制の面では<sup>22</sup>、1830年のパリ七月革命の影響をもろに受けた「九月騒乱」が引き金となった。手工業者、農民のあいだに鬱積する不満を察知した政府は、「ザクセン改革」と呼ばれる広範な国制改革に着手した。憲法と地方自治法の制定、封建地代の償却、法務・財務・内務・国防・文部・外務の6省体制への省庁整備などがその主な柱であるが、本稿の文脈からは、1831年の統計協会発足(のちに詳

述)、ならびにリベラルな雰囲気が高まり、官僚機構の中にも徐々に市民が台頭し始めたことに注目しておこう。

経済面では1834年発足のドイツ関税同盟への加入が大きい。この点に関しては、諸田実氏の研究<sup>23</sup>が詳しいので、ここではその要約のみにとどめる。内陸国家ザクセンは、外国貿易の輸出入品がドイツ諸邦を通過する際にかけられる通過関税と、割譲の結果国境地帯で孤立状態に置かれた重要なメッセ都市ライプツィヒの苦境に苦しんでいた。こうした事態を打開することが動機となって関税同盟に加入したのだが、それはザクセンの工業化に促進的に働いた。すなわち外国からの輸入品にかけられた比較の高い関税は、氾濫していたイギリス工業製品を抑制し、ザクセンのみならず加盟諸邦の工業を保護する役割を果たした。また、内部の無関税化は、それによって生ずる内陸国家の歳入減を、関税同盟からの人口に応じた配分で補償し、ドイツ国内市場の統一をもたらした。その結果、ザクセンはドイツ諸邦、とりわけプロイセンとの関係を緊密化し、交易の要衝としての地理的特長を回復することができた。

こうしてザクセンは工業社会に向かって歩み始めたのであるが、目の前に横たわる障害は大きかった。試みにそれらを列挙してみよう。

- (1) 国家機構の上層部が大部分、封建的な土地貴族によって占められていて、国民の広範な声をすくいあげ、エネルギーをまとめる体制になっていない。
- (2) 営業の自由を推進していくための営業法ができていない。
- (3) 新興の機械制工業と在来のツンフト的の手工業が販路や規制政策の面に対立している。
- (4) 近代工業に伴う新たな労働者問題が出現した。
- (5) 1840年代には経済不況と農作物の不作が重なり、社会不安が深まった。
- (6) 封建地代の償却過程は農民の不満を吸収しきれていない<sup>24</sup>。

ほかにもあるかもしれないが、こうしてみると障害の多くは工業社会の担い手となるはずの市民層が率先して解決すべき課題であることがわかる。事実、1848/49年の革命はそのようなものとして企てられ、そして失敗した。だがこの短い革命期を含むその前後の時期に、支配体制の内部にしながら工業社会の促進のために市民的イニシアティブを発揮した人物はいなかったのだろうか。実はそのような人物の代表としてザクセン史上常に名前をあげられるのが、アルバート・クリスティアン・ヴァインリヒ (Albert Christian Weinlig 1812-1873) である<sup>25</sup>。この人物は、エンゲルのザクセン政府への出仕と統計局主任への就任に際して決定的役割を果たすことになるので、まずその経歴の前半部(革命まで)をおさえておこう。

ヴァインリヒの父は裕福な家に生まれ、弁護士として職業生活を始めたあと、作曲家、さらには教会指揮者となった。母は博士の称号を持つ宮廷法律顧問官の娘であった。だからヴァインリヒは典型的な教養市民層の出身といえる。恵まれた環境で才能を伸ばすことができたヴァインリヒは、ライプツィヒ大学に入学して医学と自然科学を専攻したが、哲学や言語学にも強い関心を持っていたという。医師として職業生活を始めたが、自然科学への思い断ちがたく、2年ほどで技術雑誌の編集者へと転身した。編集のかたわら、工学系の著作を何冊か書き、1840年には博士と教授資格を獲得した。免許科目は鉱物学、地質学、工学であった。まもなくライプツィヒ商業学校(Die Leipzige Handelsschule)で教鞭をとるとともに、ライプツィヒ技術協会(Die Polytechnische Gesellschaft von Leipzig)の理事に就任した。当時ザクセンではすでに工業博覧会が5年ごとに開かれていたようで、理事就任後まもなくライプツィヒのメッセで技術協会が主催者となって開かれることになった。その準備の中でヴァインリヒはドレスデンの内務省とコ

ンタクトを持つようになり、それが縁で1844年には内務省から第10回パリ工業博覧会に派遣されるまでになった。一方、それと並行してヴァインリヒは経済学を学び、1843年にはライプツィヒ大学で経済学教授資格をえるとともに、そこで教授をしていた著名な経済学者ゲオルク・ハンセン (Georg Hanssen 1809-1894) の知遇をえた。そして1845年にはエアランゲン大学の経済学正教授の地位についている。ところが翌46年、内務省第2課長を務めていた枢密参事官が死去すると、内相は後任の推薦をハンセンに求め、ヴァインリヒはハンセンの推薦で商業、営業、工場制度、農地を管轄する第2課の課長に就任することとなった。(ちなみにエンゲルがザクセン王立統計局長をやめた後、彼をプロイセンの統計局長に推薦したのもハンセンである。その際ハンセンは兼任となっていたベルリン大学国家学教授と統計局長の分離を強く主張し、前者のポストに自らついている。)

さて、ヴァインリヒが政府高官におさまってから2年もたない1848年3月、ザクセンでも革命が始まった。すでに営業法の準備や困窮対策に取り掛かっていたヴァインリヒは、改革を進めることで事態の急進化を避けようとした。そこで役人としては異例なことに、市民向けアピールを4月3日の日刊各紙に発表したのである<sup>26</sup>。「ほかならぬ労働者問題における困窮は何をもたらすか？」と題するこのアピールで彼は、無責任な扇動と急進化によっては事態は何も進展しないことを述べたあと、次のような注目すべき提案をおこなった。

「内務省は、わが営業体制を時代の要請にかなったものへと転換するというこのきわめて重大な問題を、実際に有益な形で処理する方向に向かって、率先して歩み出す決意である。しかも、ただのいわゆる労働問題などというものよりもはるかに幅広い意味においてそうするのである。省は、すべての階層の労働者と雇用主に、営業をそれぞれの主要グループへと分類したうえでグループごとに、委員会 (Ausschüsse) を選出するよう要請したい。……この委員会の任務は、教条的な公式を考え出すことではなく、資料を集めること、実際の状況を検討すること、ならびに可能な対策について意見を述べること、となるだろう。」

この提案は、民衆を鎮撫するという政治的効果を狙っただけのものではなかった。というのも、ヴァインリヒは営業法の制定を真剣に目指していたからである。ところが彼のもとには、法案作成の土台となるべき営業の実態についての情報がなかった。それを手に入れることが緊急の課題となった。それを彼はこの委員会の活動を通しておこなおうとしたのである。必要な情報を入手するためにまずとられた方法は、アンケート調査であった。調査を実施するために、内務省内に製造業者、手工業者、専門家、学者を主要メンバーとする準備委員会 (Die Vorbereitungs-kommission) が設けられ、ヴァインリヒが陣頭指揮することになった。準備委員会はまもなく「営業・労働関係審議委員会」 (Die Kommission zur Erörterung der Gewerbs- und Arbeitsverhältnisse) と改められ、全国に組織された労使の委員会を束ねる役割が与えられた<sup>27</sup>。準備委員会は384項目という膨大な量の質問票を作成し、全国に1000をこえる規模で結成されつつあった<sup>28</sup> 労使の委員会と専門家に送付した。しかしながら質問項目が膨大だけでなく、たとえば第70項目「労働者の状態は改善を必要としているか？」のような質問は、業種や立場によって回答が実に様々となったため、得られた回答をとりまとめて利用可能な情報にするのは困難を極めた。エンゲルは1849年初頭のころ、ヴァインリヒからドレスデンの審議委員会への協力を要請され、受諾した。同年2月28日には、ヴァインリヒの内務大臣就任<sup>29</sup> にもなって審議委員会の指揮を任せられ、少し遅れて委員にもなった<sup>30</sup>。外部の協力者から国家公務員となり、内務省書記官 (Ministerialsekretär) の役職が与えられたのである。だがまもなく5月の流血の惨事が

起こり、調査に協力していた企業家たちは腰が引け、革命に参加した市民・労働者の多くは死亡または逃亡するか、拘禁された。事業は休眠状態に陥り、初期の目的を完遂することはできなかった。そうではあるがシュミットによれば、ヴァインリヒが調査結果の一部なりとも営業法の作成に利用したことは「いかにもありそうなこと」<sup>31</sup>であったし、バジリオンもそれを認めただけで、この作業がザクセンの「その後の経済発展に深い影響を及ぼした」と述べている<sup>32</sup>。

ところで、革命の動静と深く絡み合った審議委員会の活動とは別に、ヴァインリヒはこの時期、1831年設立の統計協会を改組転換する計画を練っていた。それに立ち入る前に、統計協会の歩みを簡単に見ておこう<sup>33</sup>。

統計協会は半官半民の組織として出発した。すなわち、部分的には内務省の一部を形成しながら、他方では自由な学術団体の性格を持っていた。内務省の一部というのは、予算が省から支給され、省の求めに応じて調査がおこなわれたからである。自由な学術団体というのは、組織を運営する9人の中央委員会のメンバーの大半が外部の専門家で、ヴォランティアとして活動に参加していたからである。予算は1848年度で年2000ターラーであった。そのほかに3年ごとの人口調査のたびに1800ターラーが追加支給された。2000ターラーというのは、熟練労働者の年収の10倍ほどだからわずかなものである。こうした体制で人口調査のほかに医療調査や営業調査が企てられたが、成果は粗いものだった。というのも、人手と資金の不足に加えて、調査の信頼性を高めるために必要な法的強制力を統計協会は持っていなかったからである。善意に頼るだけでは、「社会政策」的に利用されるかもしれない調査に対して、企業家や手工業者から十分な回答を得ることはできなかった。こうした状況の下で、1843年、ドイツ関税同盟第4回関税会議総会で、通関証明集計(Kommerzial-Nachweisungen)を統一した書式で関税同盟本部に定期的に送付するという提案が採択されたとき、ザクセン政府はそのための体制を整えることができず、これに応えられなかった。また、1846年、全ドイツ統計協会の設立を模索していたフォン・レーデン男爵(Freiherr von Reden)が、日給額や労働時間など7項目の質問状を送付してきたときも同じだった。ヴァインリヒを中心とする内務省高官の中で、純然たる国家機関として統計局を設置し、統計を国家が直接把握する必要性が次第に強く意識されるようになった。

1849年、ヴァインリヒと内相が正確な営業統計を得るという目的を目指して、統計局設立の方針を固めてその立案に取り掛かろうとしたちょうどそのころ、審議委員会の活動が休眠する事態が生じた。ヴァインリヒは審議委員会と統計協会を統合し改組転換することで、国家機関として法的権威を持つ統計局を設立することを決断した。最高指揮権は自らが掌握し、現場を管理する代行者を置き、実務上の責任者(Vorsteher)としてエンゲルを指名した。こうして統計局は、統計協会のスペースと業務と権能を譲り受けたうえで、1850年8月1日内務省内の新たな組織として発足した。発足当初の常勤職員はエンゲルのほかに役人が一人いて、あとは数人の非官僚専門家という小所帯であった。予算も年3000ターラーと、統計協会から大きく飛躍したとは言いがたい状況であった。しかしながら予算はすぐに、1852年6000ターラー、58年8150ターラー、75年19000ターラーと多少の曲折はあっても順調に伸びていった。人員も1881年には局長、試補および専門職員5人、正規職員14人、臨時職員15人、給仕2人となっていて、このころには十分な予算と人員を持ち、要請にこたえられる組織に発展していた。

とはいうものの、発足の時、ヴァインリヒもエンゲルもまだ統計学と統計実務の訓練を積んでいたわけではなく、基本的に門外漢であった。門外漢に国家の大任を任せられるのだろうか？エンゲルの場合、ケトレーとルプレーの下でいくらかの勉強をしてきたという事実はあったし、

それも評価に加えられたのだろうが、それとは別にもうひとつエンゲルがヴァインリヒの信頼を獲得する出来事があった。1850年は5年ごとに開かれることになっていた工業博覧会が、ふたたびライプツィヒで開催される年であった。この年の始め、ヴァインリヒはエンゲルを準備委員会の実務責任者に任命した。ルプレーのところでも触れたように、このころの工業博覧会は特別な意味を持っていた。A. ガーシェンクロンが言うように<sup>34</sup>、後進国の停滞を突破し、人々のイメージネーションに点火してそのエネルギーを経済発展へと導くためには、強い刺激が必要だったが、工業博覧会はそのためのもってこいの舞台だった。つまり、近代工業の技術的成果を目前で誇示し、黄金の時代が前途に横たわっているという確信を与え、工業化に必要な「情緒のニューディール」<sup>35</sup>を促すのである。その意味合いは、サン＝シモン主義者にとっても、またヴァインリヒやエンゲルにとっても同じであった。

エンゲルは工業博覧会の準備作業において、類まれな組織能力を発揮して、博覧会を成功に導いた。それをたたえてヴァインリヒは、閉幕後、内務大臣あてに次の書簡を送った<sup>36</sup>。

「実務担当者に関しましては、小職からのもっと詳しい報告書で、エンゲル氏……のきわめて賞賛すべき活動について、より詳しく言及することになるでしょう。そこでは、すべての事柄が比較的安価に実現されたこと、ならびに準備作業が驚くほど速やかに進展したことが、とりわけエンゲル氏の用意周到な指示によるものであるということが特別に明らかにされるでしょう。」

実はこの書簡は、間もなく設立される統計局の主任職への推薦状でもあったらしいのだ。このようにしてエンゲルは統計局の実務責任者となり、そこで研鑽を積んで1855年には書記官から係官(Referenten)へと昇進した。57年には定員外参事官(Supernumerar-Regierungsrath)に昇進するとともに、統計局長(Vorstand od. Direktor)に任命されたが、そこでの活躍は次稿の課題となる。

稿を閉じる前に、この時代のエンゲルについてもうひとつ書いておかなければならないことがある。それは結婚についてである。1848年、ザクセンに帰国してまだ職についていない時期、エンゲルはドレスデンにて3歳年下の女性ヨハンナ・フリーデリーケ・アマーリエ(Johanna Friederike Amalie 1824-1890)と結婚した<sup>37</sup>。アマーリエの父親は、ザクセン陸軍中佐でのちに財務省の役人となったイノツェント・アウグスト・フォン・ホロイファー(Innocent Augst von Holleuffer)であった。所領や身分については不明だが、名前と職業から考えて貴族の系譜に連なる人物であろう。下層経済市民と貴族という家柄の違い、さらにはエンゲルがまだ定職にも就いていないという事情を勘案すると、この結婚はエンゲルがいかに将来を嘱望された若者であったかの証左となるのではないだろうか。二人は二男一女をもうけ、「寡婦の住ひ」で晩年を共に過ごしていたが、6年に及ぶエンゲルの孤独を残して、アマーリエは66歳で先に没した。エンゲルがいかに嘆き悲しんだかは、乏しい評伝からも伝わってくるのだが、この時代のことについても、のちの課題となる。

1 所収論文は次の通り。

統計学古典選集第11巻(栗田書店, 1942年)

「労働の価格」(原著1872年)

「人間の価値」(同1883年)

- 同第12巻(栗田書店, 1941年)  
「ベルギー労働者家族の生計費」(同1895年)  
「ザクセン王国における生産=及消費事情」(同1857年)
- 2 前記選集第12巻末尾の高野岩三郎による「発刊の辞」より。
  - 3 ルーヨ・ブレンターノ著, 石坂昭雄・加来祥男・太田和宏共訳『わが生涯とドイツの社会改革——1844～1931——』ミネルヴァ書房, 2007年。
  - 4 前記選集第11巻, 13ページ。
  - 5 同上, 14ページ。
  - 6 同上, 15ページ。
  - 7 以下, 出自と家系については, おもに Ernst Meier, Christian Lorenz Ernst Engel, in: *Deutsche Biographie*, Berlin 1959より。
  - 8 ブレンターノ前掲訳書, 44ページ。
  - 9 フライベルク鉱山学校についてはおもに, 佐々木正勇「フライベルク鉱山学校の日本人留学生」, 日本大学人文研究所『研究紀要』第31号, 1985年, および木本忠昭「ベルクアカデミー・フライベルクと日本人留学生たち」, 東京工業大学『科学史集刊』2008年3月, より。
  - 10 木本前掲論文, 86ページ。
  - 11 同上, 86ページ。
  - 12 佐々木前掲論文, 36ページ。
  - 13 Emil Blenck, Zum Gedächtnis an Ernst Engel. Ein Lebensbild, in: *Zeitschrift des Königlich-Preussischen Statistischen Bureaus*, Berlin 1896, S. 231.
  - 14 ケトレーについては, 高橋政明「ケトレーにおける比較可能の思想と統計論」, 鹿児島大学法文学部『経済学論集』第8号, 1972年, 佐藤博「ケトレーにおける「統計学」と「社会物理学」の構想」, 長屋政勝・金子治平・上藤一郎編著『統計と統計理論の社会的形成』北海道大学図書刊行会, 1999年所収, 小池利彦・平野亮「〈測定〉の社会学——ケトレーとブース」(1), 『鶴山論叢』第10号, 2010年を参照。
  - 15 ルプレーについては, Arland Thornton, Frederick Le Play, the Developmental Paradigm, Reading History Sideways, and Family Myths, (Working Paper), The University of Michigan, 2005を参照。
  - 16 鹿島茂『渋沢榮一』I算盤篇, 文芸春秋, 2011年, 158ページ。
  - 17 シュヴァリエについては, 上野喬『ミシェル・シュヴァリエ研究』木鐸社, 1995年, 参照。
  - 18 サン=シモン主義と二つのパリ万博については, 鹿島同上書, 第2章参照。
  - 19 Daniel Schmidt, *Statistik und Staatlichkeit*, S. 111.
  - 20 ドレスデンの革命運動と5月蜂起については, 村上俊介『市民社会と協会運動 交差する1848/49年革命研究と市民社会論』御茶ノ水書房, 2003年, 第4章参照。
  - 21 以下19世紀前半のザクセン史については, おもに Hubert Kiesewetter, *Industrialisierung und Landwirtschaft. Sachsens Stellung im regionalen Industrialisierungsprozeß Deutschlands im 19. Jahrhundert*, Köln/Wien 1988を参照。
  - 22 ザクセンの国制史については, ゲーアハルト・シュミット著(松尾展成編訳)『近代ザクセン国制史』九州大学出版会, 1995年参照。
  - 23 諸田実『ドイツ関税同盟の成立』有斐閣, 1974年。
  - 24 ザクセンの農民解放と封建地代の償却については, 松尾展成氏の一連の著作を参照。すなわち, 松尾展成『ザクセン農民解放史研究序論』御茶ノ水書房, 1990年, 『ザクセン農民解放運動史研究』御茶ノ水書房, 2001年, 『ザクセン封建地代償却史研究』大学教育出版, 2011年。
  - 25 ヴァインリヒについては, *Allgemeine Deutsche Biographie* および Schmidt, *Statistik und Staatlichkeit*; Kiesewetter, *a.a.O.*ならびに Richard J. Bazillion, *Modernizing Germany. Karl Biedermann's Career in the Kingdom of Saxony, 1835-1901*, New York 1989, の関連箇所を参照。バジリオンはヴァインリヒについて,

高等教育を受けた中産階級から抜擢されたりベラル精神をもつ官僚の典型としてとらえた。また経済政策全般を統括する責任者であり、「ザクセン産業革命の指導精神」とも述べている (p.5, p.255)。

26 このアピールについては, Schmidt, *a.a.O.*, S. 100f.

27 この委員会の活動については, *Ibid.*, S. 101ff.

28 キーゼヴェッターによれば, 1849年4月12日の時点で1974の委員会が組織されたという。Kiesewetter, *a.a.O.*, S. 181.

29 ヴァインリヒは内相就任後すぐに, フランクフルト国民議会が採択したドイツ憲法をザクセンも採用するように国王に進言したが容れられず, 同年4月30日内相を辞任し, もとの第2課長にもどった。2か月余りの短い在任期間であった。

30 Schmidt, *a.a.O.*, S. 111f.

31 *Ibid.*, S. 102.

32 Richard J. Bazillion, *op. cit.*, p. 251, p. 256.

33 統計協会については, Schmidt, *a.a.O.*, S. 105ff.; Kiesewetter, *a.a.O.*, S. 244f. および松尾展成『ザクセン農民解放史研究序論』21ページ参照。

34 Alexander Gerschenkron, *Economic Backwardness in Historical Perspective*, Cambridge 1962, p.22-26.

35 *Op. cit.*, p.25.

36 Weinlig an Staatsminister Freiherr von Friesen am 6.06.1850, zit. nach Schmidt, *a.a.O.*, S. 112.

37 Meier, *a.a.O.* より。